

- Ayus 生命、長寿。漢訳では命、寿、寿命、寿量
- (4) 『俱舍論』第三、正蔵二九ノ十三下。
- (5) 『阿毘曇心論』卷四、正蔵二八ノ八三上。
- (6) 『入阿毘達磨論』卷下、正蔵二八ノ九八七上。
- (7) 『雜阿毘曇心論』卷九、正蔵二八ノ九四三上。
- (8) 『俱舍論』卷五、正蔵二九ノ二六中。『順正理論』卷十三、正蔵二九ノ四〇四中にも同趣のものがある。
- (9) 同右。
- (10) 同右。
- (11) E. B. Tylor. *Primitive Culture*. 比屋根安定訳『原始文化』(誠信書房、昭和三七年) 第十、十三、十四章。 *Encyclopaedia of Religion and Ethics*. James Hastings ed. (Edinburgh: T & T Clark, 1908, 1978) "Animism". The Encyclopedia of Religion. Mircea Eliade ed. (New York: Macmillan Publishing Company, 1987) "Animism and Animatism".
- (12) 比屋根安定、前掲書、一六四頁。
- (13) 岩崎武雄『哲学概論』(北樹出版、昭和五三年三月、昭和五八年四月) 六二頁。
- (14) 正蔵四五ノ四〇下。
- (15) 正蔵三五ノ四〇五下。
- (16) 正蔵一一ノ五八一上。
- (17) 正蔵四ノ四四下。
- (18) 正蔵四ノ四六上。
- (19) 正蔵二ノ七八七中。
- (20) 正蔵一一ノ五三〇中。
- (21) 正蔵一一ノ五六七上。
- (22) 正蔵一一ノ三八二下。
- (23) 正蔵一一ノ四一六上。
- (24) 正蔵九ノ四二中。
- (25) 正蔵一六ノ三三六上。
- (26) 竜樹(約一五〇〜二五〇頃)は『大智度論』卷九(正蔵二五ノ一二下)で、仏には二種類あるとして、法性身と父母生身をあげ、法性身について次の如く示す。「法性身は十方虚空に満ちて無量無辺なり。色像、端正にして相好莊嚴し無量の光明、無量の音声あり。法を聴くの衆も亦た虚空に満ちり、常に種種の身、種種の名号、種種の生處、種種の方便を出して、衆生を度し、常に一切を度して、須臾も息む時なし。是の如きは法性身の仏なり。」また生身仏については、「生身仏の次第、説法は、人の法の如し」と説いている。これによれば、法性身とは全世界に遍満しているものであり、それは色々な形を現わし、その形を通じて一切衆生救済のために活動している仏であり、生身仏はもっと具体的な人間の形をとって現われ、衆生に直接説法し、教化救済をする仏身である。
- (27) 正蔵一一ノ三四七上。
- (28) 正蔵一一ノ二六六下。
- (29) 四十八卷伝第三十七、伝集、二四二頁。
- (30) 岩本英夫『死を見つめる心』(講談社、昭和四八年三月) 一一二頁。
- (31) 柴山全慶『禅心禅話』(春秋社、昭和三七年) 序詞。
- (32) 林靈法『絶望と希望』(百華苑、昭和五四年) 一二六―二八頁。

点が指摘されよう。第一に仏教的生命観は開かれた生命観である。生物学的に見る生命は、いわゆる生物における生命である。それ故無生物は生命なきものとして取り扱われる。例えば岩石、鉱物は生命なきものとされるのである。しかし、とくに仏教的には生物のみならず無生物も含めて自然界のすべてのものに生命を認めて行くのである。

しかし、この自然物に生命を認めて行く考えは、原始的なアニミズムと混同されるものではない。それはアニミズムが自然物の個々のものに、それぞれの精霊（アニマ）が宿るとして各々に独自の生命を認めて行くのに対して、仏教では「仏性」と名づける仏の大生命を基本に置くのである。そして個々の存在がその仏性という同質の生命を有することにおいて、各々が生命をもつものとされている。

第二は、生物学的生命が有限なるものであるのに対して、宗教的生命は無限、永遠なるものとして理解される。そしてこれは有限なる生命の根源的なものとして位置づけられ、有限なる生命の意味を明らかにするものである。有限なる生命の本来の意味は単なる物理的、時間的長さによっても、身体的、心理的快楽度の度合によっても明らかになるものではない。それはどれ程真実を顕わし、またどれ程自覚的であるかによって明らかになるのである。宗教的生命観は、このように、有限なる生命を単なる有限なるものに終らせるのではなく、そのより深い、根源的な意味を開示するのである。

註

(1) 生命観の多様性

イ、二種類説。①生物学的生命、②宗教的生命。(水原舜爾『科学から仏教へ』大蔵出版、一九八〇年四月)

ロ、三種類説。①現象としての生命、②行為としての生命、③実在としての生命。(中埜肇『哲学的人間学』日本放送出版協会、昭和六三年三月)

①素朴実在論的生命、②批判的実在論的生命、③隠された実在論的生命。(柳瀬陸男『科学と宗教における生命観』『人間』I生命とは、岩波書店、一九八九年六月)

ハ、四種類説。①生物学的生命、②社会的生命、③心理的生命、④精神的生命。岸本謙一『人間回復の道』彌生書店、一九八四年六月)

ニ、五種類説。①人間の生命、②動物の生命、③植物の生命、④鉱物の生命、⑤世界の生命。(永井隆正『生命に対する畏敬』『浄土宗学研究』第十三号、知恩院浄土宗学研究所、一九八〇年)これは中村元『自己の探究』(二〇八―二〇九頁)所説のものを参考にしてゐる。

ホ、七種類説。①分子生物学の生命、②大脳生理学の生命、③医学の生命、④自己意識の生命、⑤無意識的自己の生命、⑥人格的身体の生命、⑦開放的生命(玉城康四郎『生命観の転回』『生命科学と宗教』I、佼成出版社、昭和五十七年四月)

(2) 釈尊の一代については多数の書物が出ているが、次に二・三をあげておこう。

①増谷文雄『仏陀』(角川書店、昭和三十一年)

②水野弘元『釈尊の生涯』(春秋社、昭和三十五年)

③中村元『ゴータマ・ブツダ』(春秋社、昭和四十四年)

④渡辺照宏『新釈尊伝』(大法輪閣、昭和四十一年、五十三年)

(3) サンスクリットで「生命」を表わす語は三つある。①jīva生きる、生活する、生命の本源。漢訳では命、命者、存命、活命、寿命 ②dāna呼吸、生気、活力。漢訳では生、命、身命、寿、寿命 ③

一時一処に全身全霊を打ちこんで、力一杯咲き誇っている花の姿の中には、夜来の風雨に散って行く運命にありながらも、そこに永遠の生命の輝きがある。われわれが文字通り一所懸命に生きるとき、そこには有限なるわれわれでありながらも、永遠の生命の輝きを見ることができるのである。

また椎尾弁匠師はその道詠で次の如く示しておられる。

時はいま ところ足もと そのことに

打ちこむいのち とわのみ命

これもまた、いまの一時、足もとに置かれた、なすべき仕事に打ちこむ、その生命に、とわの、すなわち永遠の、生命の輝きを感じることができると、理解できよう。一瞬に打ちこむ生命の絶対性ともいべきものがそこに感じられる。しかしこの道詠はこのような単なる倫理的意味以上のものがあるのである。林霊法氏はテレビの対談の中で次の如く述べておられる⁽³²⁾。

ここに大僧正〔椎尾弁匠大僧正〕のあの深い強靱な思想体系も、あの深厚な南無阿弥陀仏のご信仰もよく示されています。只今の仕事に打ちこむのは、たしかにこの私がやっているのですが、南無阿弥陀仏を通してそこには弥陀の大きな命が私の仕事の中にあられ出ているのです。念仏の中にすすめられ、あらわれる仕事、ひろくは全生活、全人生というものが、そこでいかに尊い意味あるものかということが云えるのです。

そして、さらに椎尾大僧正の共生運動が単なる倫理運動ではないことを示しておられる。

共生運動はただ仕事に熱中すりゃいいんだ、この仕事がすんだら、先きへさっそうと突進せよということ、一部では一種の威勢のよい修養会か倫理運動まがいのものに思われているようです。しかし、あの只今の仕事なり活動にうちこむあの熱意なり真剣さというものは、単なる人間的、或いは倫理的な次元からした努力や熱心さとはちがいます。念仏の中に、念仏を通して、いまうちこむ仕事の中に、弥陀の大きな命のはたらきを受けとるのです。ですから、「打ちこむ命、とわのみ命」とあります。いまこの私がこの仕事に打ちこんでいるのだが、実は打ちこむ命は、この私の小さな命ではなくて、念仏を通してそこにあらわれている弥陀の大きな生命なのです。だからこの私の打ちこむ命を「とわのみ命」として受けとらせていただきます。

かくの如く、これは単なる倫理的な実践行を鼓吹した詠ではない。われわれが打ちこむ生命そのものは、実はわれわれが永劫の昔より、体を通して脈々と流れる尊い仏の生命に生きることの意味するものである。この尊い生命を無自覚に生きるのではなく、自覚的に生きて行くとき、そこに有限なる生命が無限なる生命としての意味をもつて来るのである。

ま と め

宗教的な生命観を論ずるに当り、とくに仏教的観点からこれを見るとき、以上の如き特徴をあげることができよう。ここには二つの

蔵は如来の示された二百一十億の善悪、麤妙の国土から莊嚴な浄土を選び、その実現のため殊勝の願を立て、五劫という長い間修行して、この願を成就し、仏となられた。これが阿弥陀仏、すなわち無量寿仏である。換言すれば、無量寿なる永遠の生命は仏道修行により開悟得道することによって得られる生命である。

浄土教で「往生」というのは文字通り、「往き生まれる」ということである。これは教理的には浄土の世界に生まれることである。それは仏の国土、すなわち無量寿の世界に生まれるということであり、これはまた無量寿を得て生きるということでもある。

法然上人は亡くなられる少し前、すなわち建暦二年正月三日、ある弟子が上人に「今度の往生は決定か」とたずねられたとき、「われもと極楽にありし身なれば、さだめてかへりゆくべし」と答えられた。⁽²⁹⁾かくして法然上人は、この世の有限なる生命が終ったとき、再びわが故郷、浄土へ帰る、すなわちみ仏の無限の生命の世界に入っていくことを確信しておられたのである。

四、有限即無限の生命

生命は時間的な長さ、空間的な広さでとらえるだけでなく、瞬間の時と場においてとらえることができる。これは「永遠なる現実の生命」である。岸本英夫氏はこれを「現実の一刻一刻の生活の中に永遠の生命を感得せんとするものである。」⁽³⁰⁾と示している。そこには有限なる生命の中に無限なる生命が現われているのである。これ

は芸術家が一心不乱に作品に打ちこむところに現われ、また禅家の宗教体験の中にも見ることができる。

道元禅師の『正法眼蔵』生死の巻には、「生はひとときのくらゐにて、すでにさきありのちあり。かるがゆゑに仏法のなかには、生すなはち不生といふ。滅もひとときのくらゐにて、またさきありのちあり。それによりて滅すなはち不滅といふ。生といふときには生よりほかにものなく、滅といふときは滅のほかにもものなし。かるが故に生きたらばただこれ生、滅きたらばこれ滅にむかひてつかふべし。いとふことなかれ、ねがふことなかれ。」と示されている。現実の「生」の一瞬はまた同時に「滅」の一瞬でもある。そこに「生即不生」「滅即不滅」と理解される世界が実現している。すなわち、いまのこの一時に絶対的な意味と価値とを自覚する生命のあり方がそこに示されている。無自覚な日常性の中の時間は、単なる物理的な時の流れにすぎない。しかし「生即不生」の「時」はその一瞬一瞬がかけがえない時間として自覚されて来るのである。そこには有限なる生命の無限性が顕現されるのである。

南禅寺の元管長、柴山全慶老師は花に寄せて次の如く詠んでいる。⁽³¹⁾

花は黙って咲き、黙って散って行く

そして 再び枝には帰らない

けれども その一時一処に この世の全てを托している

一輪の花の声であり 一枝の花の真である

永遠にほろびぬ生命のよるこびが

悔いなくそこに輝いている

の衆生を教化し、しかも衆生を済度する方便として入滅された。しかし本当には入滅していないのである。常にここにあつて法を説いているのであるが、衆生の迷いの目にはそれが見えないのである。ここにも仏の寿命の永遠なることが示されている。

『金光明經』卷第一(壽量品)⁽²⁵⁾には、釈尊の寿命について、次の如き偈をあげている。

一切の諸水、幾滴なることを知るべくも、能く、釈尊の寿命を数ふることあること無し、諸の須弥山の、斤両を知るべくも、能く、釈尊の寿命を量ることあること無し、一切の大地の塵数を知る可くとも、能く、釈尊の寿命を算ふることあること無し、虚空の分界、尚ほ辺を盡すべくとも、能く、釈尊の寿命を計ることあること無し、不可計劫、億百千万、仏壽是の如く、無量無辺なり。ここには釈尊の寿命の無量なることが示されている。これはいうまでもなく、成道後の釈尊について語るものであり、仏の生命の永遠性を表わすものである。⁽²⁶⁾

『阿弥陀經』⁽²⁷⁾には釈尊が弟子舍利弗に向つて、阿弥陀仏について語っている。そこには次の如くある。

舍利弗よ、汝が意においていかん。かの仏を何が故に阿弥陀と号したてまつる。舍利弗よ。彼の仏の光明無量にして十方の国を照らすに障礙する所なし。この故に号して阿弥陀となす。また舍利弗よ。かの仏の寿命及びその人民無量無辺阿僧祇劫なり、ゆえに阿弥陀と名づく。

すなわち、阿弥陀仏とは光明無量、寿命無量の仏であることが示さ

れている。阿弥陀とはサンスクリットのアミターバ (Amitābha) アミターユス (Amitayus) から出た言葉である。前者は無量光、後者は無量寿という意味である。阿弥陀仏は一般に無量寿仏ともいわれる。

『無量壽經』⁽²⁸⁾卷上には阿弥陀仏の因縁が次の如く説かれている。

乃往過去久遠無量不可思議無央數劫に錠光如来、世に興出して、無量の衆生を教化し度脱して、みな道を得せしめて滅度を取り玉ひき。次に如来まします。名けて光遠と曰く。乃至、次を処世と名く。かくの如きの諸仏(五十三仏なり)みな悉く已に過玉ひにき。爾の時次に仏あり、世自在王如来と名く。時に國王あり、仏の説法を開き、心に悦子を懐きて、尋いて、無上正眞の道意を發して、国を棄て王を損て行して沙門と作り、号して法蔵と曰く。高才勇哲にして世と超異せり。世自在王如来の所に詣て、(乃至)ここにおいて世自在王仏、すなわち為に広く二百一十億の諸仏刹土の人天之善惡国土之羸妙を説く。その心願に應して、悉く現して之を与へたまふ。時に彼の比丘、仏の所説の嚴淨の国土を開き、みな悉く觀見して無上殊勝の願を超發す。その心寂靜にして志所著なく、一切世間によく及ぶ者なし。五劫を具足して、莊嚴仏国清淨之行を思惟攝取しき。

数えきれない程無量の年月の昔に錠光如来という仏がおられ衆生教化済度利生された。その後、光遠、処生と五十三仏が出られ、続いて世自在王如来が現われた。この時、一国の王が如来の法を聞き、感動し、心に喜びを懐いて、出家し、法蔵比丘と名づけられた。法

永遠の仏身とは、仏の悟りを開かれた身である。この常身が仏の永遠の生命を現わすものである。同経卷三十四（迦葉菩薩品⁽²¹⁾）には次の如くある。

如来身に凡そ二種有りと説く。一つには生身、二つには法身なり。生身と言ふは即ちこれ方便応化の身なり。かくの如き身はこれ生・老・病・死・長・短・黒・白・これ此・これ彼・これ学・無学と言ふことを得べし。わが諸の弟子、この説を聞き已りて、わが意を解せずして、唱へて言はく、「如来は定んで仏身はこれ有為法と説く」と。法身は即ちこれ常・楽・我・淨なり。永く一切の生・老・病・死を離る。白に非ず・黒に非ず・長に非ず・短に非ず・此に非ず・彼に非ず・学に非ず・無学に非ず、もしは仏の出世にも及び不出生にも、常住にして動せず、変易有ること無し。善男子、わが諸の弟子、この説を聞き已りて、わが意を解せずして唱へて言ふ。「如来は定んで仏身はこれ無為法と説く」と。

ここでの議論は、仏身は有為法か無為法か、すなわち、仏身は有るのか無いのかということに関するものである。生身といえは有為法、法身といえは無為法であるという。この議論に対しては、大乘仏教哲学では、両者（有為法、無為法）のいずれかに執られることは誤りであり、この両者を限りなく止揚しなければならぬ。ただここでの引用の目的は仏身というのに二種類あることを示そうとするものである。それは生身と法身である。生身とは歴史上に現われた釈尊の肉身体であり、これは生老病死等の対象となる身体である。これに対して、法身というのは常楽我淨を内容とし、生老病死など

を超越したもので、すなわち、永遠なるものである。また同経卷第三（金剛品⁽²²⁾）では、永遠の仏身即ち法身について、「如来身はこれ常住身、不可壞身、金剛身、非雜食身、即ち法身なり」と示している。如来身、すなわち法身は常住不変であり、壞れることのない金剛の身であり、有限なる凡夫（業縁所感）の身ではない。これが法身であるというのである。またこの経の同じ所で、仏が弟子迦葉に対して「如来の身は無量億劫なり」とも示している。同経卷八（如来性品⁽²³⁾）には、「如来の性は実に生滅無きも、衆生を化せんが為に、生滅を示すのみ」と説いている。これは釈尊の入滅されたことにより釈尊の生命がすべて終わったという考えに対して、そうではなく、釈尊の本当の生命（性）は永遠不滅（無生滅）であるが、ただ衆生済度のために一時この世に現われただけだということである。

『法華経』卷五（如来寿量品⁽²⁴⁾）には「われ成仏してより已来甚だ大に久遠なり。壽命無量阿僧祇劫にして常住して滅せず」とし、さらに次の如く示している。（久遠偈）

われ仏を得てより来、経たる所の諸の劫数は、無量百千万億載阿僧祇なり。常に法を説いて無数億の衆生を教化して、仏道に入らしむ。爾しより来無量劫なり、衆生を度せんが為の故に方便して涅槃を現わすも而も実には滅度せずして常に此に住して法を説く。われ常に此に住すれども、諸の神通力を以て、顛倒の衆生をして、近しと雖も而も見ざらしむ。

釈尊は本当には、悟りを開いて、すでに無量百千万億載阿僧祇劫という数えきれない程の年月を過してきている。そしてその間、多く

「非仏性とは、いわゆる一切牆壁瓦石無情の物、かくの如き等の無情の物を離れて、これを仏性と名づく」⁽¹⁶⁾の文によるのではないかと思われる。このように「悉有仏性」を主張する涅槃經でも草木の仏性を否定するのであるが、いま華嚴經の円教によれば、仏性と真如の働きは共に正（人間）と依（草木）いずれにも存在するのである。それ故、器世間（自然）衆生世間（人間）、智正覺世間（仏）の三つの世間に仏性があるのである。国土身（草木国土）なども仏の身といえる。それ故、仏とは狭義では仏のみに限られるが、仏性は草木などの非情にも遍在しているのである。

三、永遠の生命

宗教的生命觀の顯著な特徴は「永遠の生命」ということである。生物学的生命は生物学的死をもつて終るが、宗教的生命は生物学的死をもつて終るものではない。われわれの日常的な生命は有限であるが、この有限なる生命は永遠なる生命の一部をなしている。

仏教的には寿（命）は先に見た如く有限なる生命である。これが仏になることにより無量寿となるのである。この有限なる生命は仏教的自覚（悟）を通して、無限なる仏の生命に生まれ変わって行くのである。

仏教の開祖、釈尊は八十歳で入滅されたが、このとき弟子達は釈尊の本当の生命が亡くなったとは考えていなかった。『仏所行讚』卷五（離車辭別品第二十四）⁽¹⁷⁾には「仏身の存は亡ぶとも、此の法は

常に盡くる無し」と示している。釈尊の肉身は亡びても、釈尊の説かれた「法」（教え）は永遠に亡びるものではない無尽のものであるというのである。同本涅槃品第二十六⁽¹⁸⁾には釈尊が入滅するに當つて、「われ今、中夜を以て、當に涅槃に入るべし、汝等は當に法に依るべし」と示された。すなわち、弟子達は釈尊の肉身に従うのではなく、法に従うことを示している。これはこの「法」が永遠であり、そこに釈尊が生きていることを物語るものである。

『増一阿含經』卷四十四（十不善品）⁽¹⁹⁾には、阿難が仏に「もし如来滅度の後、正法世に存すること、當に幾時を経べきや」と問うたのに対して、仏は「我滅度の後、法は當に久しく存すべし。」といい、また「我釈迦文仏の壽命は極めて長し。然る所以は、肉身滅亡を取ると雖も、法身存在す。」と述べている。すなわち、釈尊は入滅してもその残された法は久しく存在するというのである。ここにいる法身とは、釈尊が説かれた法（教え）を指すのであつて、後に展開してくる法身仏とは異なるものであるが、法そのものが永遠であるという考えがここには見えるのである。

『大槃涅槃經』卷第二十八（師子吼菩薩品）⁽²⁰⁾には、「仏の言はく、『善男子、仏身に二種あり、一つは常、二つには無常なり。無常とは一切衆生を度脱せんと欲するが為に、方便して示現す。これ眼見と名づく。常とは如来世尊の解脱の身なり。』」と示されている。仏身について二種類ある。一つは常にある身であり、他は無常の身である。無常の身、すなわちある一定期間の後死滅する身とは、一切衆生を救うため、この世に現われた仏の姿である。常身、すなわち

全宇宙は神の発現である。」⁽¹³⁾としたのである。

③デカルト (Rene Descartes 一五九六—一六五〇) は物心二元論を主張した。かれは精神を身体から、また精神を物質から独立させた。一切の物質的現象は長さや広さと深さという空間的拡がりをもった、いわゆる「物体即延長」といった考えを示した。ここにおいて、物質的なものは生命なき、単なる広がりをもったものとされた。かれによれば、自然は物であって、生命なきものとみなされた。かくして、かれは生命論的自然観ではなく、機械的自然観を主張した。

3、仏教

仏教には草木国土悉皆成仏という思想がある。これは人間のみならず、自然界の存在にも仏性があり、それ故に成仏するというものである。

吉蔵(五四九—六二三)は『大乘玄論』卷三⁽¹⁴⁾で『華嚴経』、『大集経』、『涅槃経』、『唯識論』などをあげて、山川草木に仏性のあることを示している。『華嚴経』(入法界品)に善財童子が弥勒の楼を見て無量の法門(悟り)を得たのであるが、これは「物に観じ、性を見て即ち無量の三昧を得るに非ずや」としている。すなわち、物の中に仏性(仏の生命)を観ることによって、悟りを得たというのである。『大集経』には、諸仏菩薩は一切諸法(この世のすべての存在)は菩薩(仏)でないものはないとし、「万法は悟れば即ち是れ菩薩なり」と示しているとして、すべての存在に仏の生命を認めているのである。『涅槃経』(第三)には、「一切諸法の中に安樂の性あり」

と示すが、これもすべての存在の中に安樂の性、すなわち仏の生命があることを示すものである。『唯識論』(菩薩流支訳、『楞伽唯識論』)では、文字通り、ただ識のみあって境(対象世界)なしと考えている。対象世界としての山川草木もすべて心像であって、心の外には存在しない。このことから依(山川草木)と正(私)とは不二であるといい、続いて「依正不二なるを以ての故に衆生に仏性あらば則ち草木に仏性有り。此義を以ての故にただ(但)衆生に仏性あるのみならず、草木にも仏性あるなり。」と示し、私と山川草木が全く別のものではなく、その本質において合い通ずるものがあり、それ故、衆生に仏性があるならば草木にも仏性があるとするのである。かくして、山川草木にも仏の生命のあることを説くのである。

法蔵(六四七—七一三)は『華嚴経探玄記』卷一六(第九節通局門)⁽¹⁵⁾で「若し三乗教ならば、真如の性は情と非情とに通ずるも、仏性を開覚することは唯有情に局る。故に、涅槃に云く『非仏性とは謂く草木等なり』と。もし円教の中ならば、仏性と及び性起とは皆、依正に通ずること下の文に辨ずるが如し。是の故に成仏には三世間を具し、国土身等は皆是れ仏身なり。是の故に、局れば唯仏果なれども、通ずれば非情に遍ずるなり。」と説いている。これによれば、真如は元来、情(心あるもの、人間)にも非情(心のないもの、草木山河)にもあるが、三乗の教に従うと、仏性のあるのは、情に限るのである。このため涅槃経には、「一切衆生に悉く仏性がある」といつてはいるが、非情、すなわち草木などにまで仏性ありとは示していない。この説は、北本『涅槃経』第三七卷迦葉菩薩品にある

これらのものから、命、命根、寿という言葉の内容をまとめると次の如くなる。

イ、命、命根、寿は同一異名のものである。

ロ、命根は前世の業をもととして現世の生を可能にするものである。

ハ、命根は現世の生を継続させ維持させるものである。

すなわち、命（または寿命）というのは、われわれの生命活動のもとをなすと同時に、生命活動そのものを指しているようである。

二、自然の生命化

1、アニミズム

アニミズムとはこの世のすべての存在にはアニマ（魂・精霊）が宿っているという考えである。イギリスの人類学者、E・B・タイラーは未開人の宗教観念を調査研究した結果、その最も原初的なものとして、かれらは、宇宙の諸現象にはそれぞれアニマが内在し、それが活動すると考えていたと結論した。とくに自然界についていえば、自然は生きているものであり、動物、植物のみならず、一般に生命なき無生物といわれるものにさえアニマが内在し、一つの生命があるとみなされていたのである。^①

このように自然界を一つの生命体と考える根拠はアニマの活動にあるのだが、ここでとくに注意すべきは、この自然界のそれぞれの存在にはそれぞれ個有のアニマ・精霊が内在するという考えであ

る。^②つまり、自然界の木、石、水などにはそれぞれ独自のアニマがあり、それらが活動する生命力をもっているというのである。ここには諸霊という観念があるのであって、諸霊を統合する一つの、いわば大霊という観念はまだ明らかではなかったのである。

2、キリスト教

① 聖書の「創世記」第一章には、神が天と地を作り、草木や生物を創造される過程が描かれている。すなわち、第二日目に草木を、第五日目に水の生物、鳥を、第六日目に家畜、獣、人間を作り、人間にこれらのものを「治める」よう命じた。すなわち、神は人間を祝福していわれた。「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ。」かくして、ここには人間は自然と異なり、自然を支配するよう位置づけられた。

② ルネッサンス時代に生命論的自然観を主張した人にブルーノ（Giordano Bruno 一五四八—一六〇〇）がいる。かれは教会の手によって火刑に処せられたが、その自然観は当時のイタリアの自然哲学の流れをくむものである。その基本的主張は、神は世界と密接な関係を保っており、世界の隅々まで、神的生命が働いているのだという汎神論的なものである。かれによれば「永遠に創造する活動的な神が、その超越的原因としてではなく内在的原因として、すなわち『能産的自然』として、『所産的自然』たる無限の宇宙の根底に存する。神は宇宙における一切の事物の生命であり、この神的生命に貫かれて、云いかえれば自らのうちに神性を宿すことによって、

と「寿」をあげることができよう。⁽³⁾これらの内容については、アビダルマ論書に比較的詳しく論じられているので、これを基に「命」「寿」について一瞥しよう。

① 命根の二とは謂く衆同分に於いて能く続し、及び能く持することなり。⁽⁴⁾

命根には二つの働きがある。一つはすべての生物がそれぞれの形や性質をもっているのだが、その形や性質を次の生（死有）まで続け、二つにはさらにそれ以後も、それを継続させる働きをもっているのである。

② 命根は根、及び大等を相続して断ぜざらしむ。⁽⁵⁾

命根は六根といわれる眼耳鼻舌身意という感覚器官、四大といわれる地水火風という生存の諸要素を継続させ、維持させるものである。

③ 先業の所引にして、六処が相続することと間断無きこととの因にして、それに依つて四生五趣を施設するもの、是れを命根と名づけ、亦、壽とも為す。⁽⁶⁾

命根はまた寿ともいわれるものであるが、これは過去の業によって現世の生を成立せしめる原因とも考えられるものである。また、これは眼耳鼻舌身意の六つの感覚器官による認識作用を継続させるものであり、また、これらの働きによって、胎卵湿化という四つの生、現実の生活行動を通して生まれる業によって生きて行く五つの世界、即ち、地獄、餓鬼、畜生、人間、天上（阿修羅を除く）という世界を展開していくものである。

④ 命とは壽なり。謂はく、陰、界、処の不壊を得ず。⁽⁷⁾

命（根）は寿である。それは五陰（色受想行識）十八界（六根―六つの感覚器官またはその機能、六境―六根の対象、すなわち色声香味触法。六識―六根と六境を縁として生じたもの）また十二処（六根と六境）などが、破壊されず継続しているものである。

⑤ 命根の体は即ち壽にして、能く煖と及び識とを持す。⁽⁸⁾

命根の本体は寿であつて、その寿はまた、煖（温み）と識（心識）とを保持するものである。

⑥ 煖と及び識とが還つて此の壽を持す。⁽⁹⁾

これは、「この壽を何の法か能く持する」という経量部の問いに対する、有部の答えである。⑤において寿が煖と識を持するというのに対し、ここでは煖と識が寿を持するというのである。これらによれば、寿・煖・識は三者一体となつてゐること、すなわち、寿命なるものは煖と識があるということであり、また煖と識があるとき寿命があるということになる。

⑦ 壽と煖と及び識との三法が、身を捨する時、所捨の身は僵仆す。⁽¹⁰⁾

寿と煖と識が身体を離れたとき、その身体は死んだということになる。

以上あげたものは、仏教思想の中でも、主として説一切有部のものである。この教えは存在の諸要素（法）を實體視する傾向にある。（これに対して当時の経量部、さらに後の大乘仏教では、それらの諸要素を仮有のものとして、實體視しないようになって来る。）こ

宗教的生命観

服部正穩

序

生命観そのものについては色々な角度から論じられうる。そこには生命を二種類に分ける考え方から、三種類、五種類、七種類に分けて考える説⁽¹⁾などがある。生命といえ、一般的には生物学的観点からのものであるが、これを広い視野から考察するときには、宗教的な観点からの生命も含まれて来るのである。ここでは、宗教的な生命観についてとくに、仏教的な視野から考察することにする。

一、有限な生命

1、釈尊が出家された動機の一つは死の克服にあった⁽²⁾。四門出遊の物語りが象徴的に示すところによれば、釈尊は若き日、城外に老人(東門)、病人(南門)、死人(西門)、修行者(北門)を発見され、

老病死という人生の現実を見せつけられ、それらの苦悩を克服すべく修行者の道に入られたという。これらは明らかに、釈尊自身が、人間として有限なる生命を自覚されていたからである。この有限なる生命の自覚が、釈尊をして出家せしめたのである。

2、『法句経』には有限なる生命に言及するものがある。第一八二には「ひとの生をうくるはかたく、やがて死すべきものの、いま生命あるはありがたし」と示し、また第一四八には「けがれを積み、この身はやがて亡ぶるなり、生命あるもの、誰か、死にをはらざる。」とある。現実に生命あるもの、生きているものにはすべて死が訪れるのである。また第一二八には、死は必ずどこにでも訪れると次の如く示す。「虚空^{ソウカラ}にあるも、海にあるも、はた、山間の窟に入るも、およそ、この世に死の力のおよびえぬところはあらず。」これらの言葉から、釈尊自身が、いま生きている生命の有限なることを明白に確認していることが判るのである。

3、仏典の中で「生命」に関する記述を見ると、そこには「命」